

万葉の風土

犬 養 孝

(はじめに)

今日は皆様が大勢来て下さって、そして、武庫川女子大でこういういい会場を提供して下さい、上代文学会の大会がひらけることを大変うれしく思っています。

それで、今日は「万葉の風土」と題しましたけれど、一言で言えば、万葉の風土よもやま話という心持ちで聞いて下さいませ。

さて、万葉集を読む時には、大事なことが三つあると思います。

一つは、なにしろ万葉集は約千三百年前のものですから、その時代に戻さなければならないということですから、その時代に戻さなければならぬということですから、その作った人の時代の中に置いてみるのが大切です。

次に、万葉集は平安以後のものとは違って、日本全国のもので、出たこないのは北海道など少しだけで、日本全国ほとんど出て来ます。ところが、日本はこんなに長い。それだけにどうしても風土が違いますから、風土に即して理解しなければならぬ。

第三番目は、歌はなんといっても生命です。作者の心が躍っています。だから、心の音楽としてとらえること。その三つです。時代を元に戻し、風土を元に戻し、音楽として、一つの心の音楽として理解しなければならぬ、ないとも思うのです。そうすると、歌の心が現代に生き生きとよみがえってきます。その証拠を一つお話ししましょう。

僕は大阪大学にいました時から、大阪大学萬葉旅行之会というのをしています。それに学生がとてめたくさ

ん来るんです。飛鳥川の流れを見ると、川の中から実際に千三百年の声が躍り出て来る。だからみんな忘れられないで来ているんです。その会は、大阪大学をやめてもなお続けてほしいと言われ、現在、この五月の末に二百五回目です。参加した学生は、全部で三万七千名になるうとしていきます。これだけの学生が、僕と一緒に日本全国を歩くのは、実際に参加することによって理解できるから、万葉が生きているからではないかと思うのです。

それからまた、毎日放送で毎年二月にラジオウォークというのをやっています。今年は第七回目で春日野を中心に行なった。すると一万七千名の一般の参加者が来ておられる。みんな夢中になって歩いておられるのです。それを見ると、時代を元に戻し、風土を元に戻し、歌は音楽として理解すると、万葉の歌が現代によみがえるところであることを実証しているようなものだと思う。では、いろいろな万葉の風土よもやま話を八通りに分けて、急いでお話したいと思います。

(一)

まず第一番は、万葉の世界。この日本地図を見て下さい。万葉集に出て来ないのは、北海道・青森・秋田・岩手・山形と沖繩県、後は全国です。そこで、万葉の風土

のさいはてを見てみよう。北は、宮城県遠田郡涌谷町黄金迫、黄金山神社の辺りです。東経一四一度八分・北緯三八度三二分。南の端は、鹿児島県阿久根市の黒の瀬戸。昨 year 上代文学会でこの黒の瀬戸に連れて行っていただきました。これは、東経一三〇度一〇分・北緯三二度五分です。

西は、対馬だとも思うかも知れないが、実は五島列島です。五島列島福江島の北西端に三井築という所があります。みみらくの崎ですね。そこが西のさいはてです。東経一二八度四一分・北緯三二度四五分の所です。一方、東のさいはては北のさいはてと同じ所です。そして、大和を中心にして黒い点が打ってある所は、万葉の地名がたくさん出て来る所です。そうすると、これだけ日本列島が長いのですから、これは、風土が違えばまったく考え方の違いが出て来ることをも示していますね。

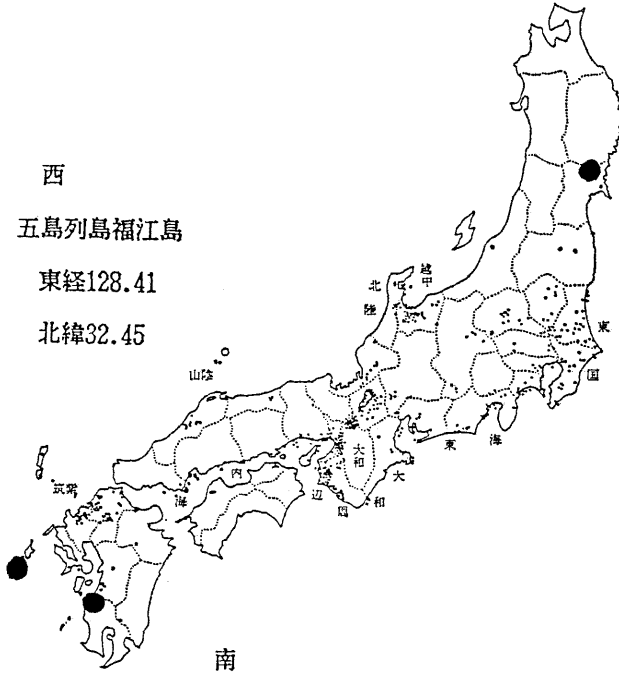
(二)

二番の話は中央の影響ということ。万葉の故地が日本の各地にあるのは、中央大和に朝廷があるからです。その影響下にはない歌は一つもないのです。西方への使者、あるいは、天皇の各地への行幸、みんな中央の影響があります。東歌だってやはりあれだけ記録されるこ

北・東
 遠田郡涌谷町
 黄金迫
 東経141.8
 北緯38.32

西
 五島列島福江島
 東経128.41
 北緯32.45

南
 阿久根市黒ノ瀬戸
 東経130.10
 北緯32.5



付図 1

とは、中央の人によるのですから、中央の影響下にある。だから、中央の影響下で万葉の全体が、この日本国土の上に動いているという感じがする。
 で、僕が全国の万葉故地の中で、最後の故地を訪ねた

のは昭和三十六年でした。『万葉の旅』を書くために、五島列島の福江島が一番最後でした。万葉の故地を何回も何回も歩いたけれど、一つ残らず歩いたのは、昭和三十六年の春三月でした。その時、はじめて万葉の故地全

部を完全に歩き終ったのです。

福江島三井楽という所に泊って三井楽の半島を一人で一周しました。その日、歩いた所は一番最後だけに印象が鮮やかです。菜の花が咲いていました。特に溶岸台地を歩いていきますと椿の花がきれいでした。そして遙か向こうに五島列島の山々、島々が見えていました。

歩いている時、あらずいぶん歩いたなあ、よく歩いたなあ、これで日本全国全部万葉の風土をすっかり歩いたなあと思っていると、歩きながら何か直に、万葉の風土が生態的に立体的に浮かび上がって来るような感じがありました。本でも何でも最後まで読まなければならぬということも思いました。最後のページまで、いうならば万葉の故地の全部をこれだけ歩いたという喜びと自信みたいなものが出来てきます。ここに中央から地方へというのも、そういう形で立体化して万葉の故地が分かるということですよ。

(III)

さて、三番目は雪と風土。日本列島こんなに長いでしょう。だから雪一つでも、みんな受け取り方、感じ方が違います。札幌の人が雪を感じる感じ方と鹿児島の人が感じる感じ方とは全然違う。それをたびたび旅行して歩

いて見ますと実際に感じますね。

札幌で二月に一週間くらい過ごしたことがあります。一人も雪を見ている人いないんですね。驚いた。僕は雪ばかり見ているのです。雪が珍しくて部屋の中から一生懸命見ている。ところが、その子どもは、みんな外で遊んでいるのですが、雪遊びしている子は一人もいません。みんな普通の子どもの遊び、かくれんぼなんかしています。雪なんか問題にしていけない。いいものを僕は見たと思う。僕自身は雪ばかり見ていたから、先生は気が変になったのではないだろうかと言われたぐらいです。

そこで飛鳥に行きますと、飛鳥には雪はめったに降らない。降ってもせいぜいほんの白くなる程度です。大雪なんか絶対に降らない。ある時、雪の日に五百五十人を連れて飛鳥万葉旅行をした。そしたら村の人達が「先生、わたしはここに何年も住んでいるけれど、今日初めてきれいな雪は初めてです」と言う。みんなそうなのです。僕と一緒に歩いていた人達も「先生、何てきれいでしょ」ともう夢中です。雪が甘樫丘で降って来ると「先生、八甲田山の雪みたいですね」とまで喜んでいました。

それでは、飛鳥浄御原宮の天武天皇は、雪が降った時、どんなに喜んでいらっしゃるか。それが三番目で

す。

わが里に 大雪降りり 大原の 古りにし里に 降
らまくは後 (2・103)

天武天皇が妻のひとり、鎌足のお嬢さんの五百重娘に贈った歌です。そして大原というと、飛鳥浄御原宮址はどこか定まらないけれど、五〇〇メートルくらいの近い所でしょう。その大原に五百重娘が帰っていた時、雪が降った。これは、この字の通り大雪というのは、一メートルも降るかというと、全然違うでしょう。さらっと、足で蹴ると消えてしまう程度の雪。昔も今も飛鳥の雪はほんの少し。それを、わが里に大雪が降ったよ、韻を揃えて、大原に、古ぼけたお前さんの里に降るであろうことは後よ、と威張っているでしょう。

この歌一つだけで、わが里に大雪が降った、一メートルくらいかな、などと思ったら大まちがいです。わが里に大雪降りりは、飛鳥の雪です。大雪という言葉には作者の喜びが一杯です。わが里にこんなに大雪が降ったよとうたう作者の夢中な喜び、さきほど八甲田山の雪と言ったのと、同じ気持ちが入っています。

天武天皇にこたえて五百重娘は、

我が岡の 霰かみに言ひて 降らしめし 雪のくだけし
そこに散りけむ (2・104)

とうたって、それは、わたしの里の大原の神様に言いつけて降らせた、雪のとぼちちりがその辺に散らばっているだけじゃないのと返しています。女性の歌は女性らしいし、男性の歌はすき間だらけでしょ。たいへん夫婦仲の良いこと、古代宮廷に於けるユーモアに満ちた世界が思われます。

(四)

今度は四番目、もみじと風土。日本は四季の変化が本当に激しい。ところが台北に行くと、真冬でも日本の夏の感じですよ。僕が日本から台北に行ったのは二月でした。二月にどこの家も窓を開けているのです。やしの木がかさかさして、全く熱帯に來た感じ、それでも台北の人は寒いと言っていました。

緑濃いから常夏の国です。真冬で、木もやはり黄葉するけれど、その時期は木によってまちまちで、秋黄葉するとは限らない。で、木によっては、一晩で葉が落ちて、もう次の時には新芽が出て来る。そんな風でした。

その上、台北では二月に螢がいるのです。その時、いろいろな事を考えました。台北で終戦を迎え、書物を全部失ったけれど、そういうことの収穫は大きいですね。僕は、螢が飛んで来ると、気味悪くて体をよけて、火の

玉が近づいて来ると逃げるのです。日本だったら、夏にはほーほーたる来いで親しいが、台北だったら逃げる。そこにやはり風土の違いがある。

ああいう所に住んでいる人、こういう所に住んでいる人、みんな違うのです。もみじ一つでも、日本だから秋もみじするのです。そして台北だったらもみじはいつでも、月によってそれぞれに落葉して、またすぐ生えて来るのです。風土の違いということを台北で大きく感じました。

今朝の朝明 かりがね聞きつ 春日山 もみちにけらし わが情痛し (8・一五二三)

もみじも万葉の中で、飛鳥のもみじと平城京のもみじとは違います。飛鳥の人は生活と密着したもみじです。ところが、平城京になると、もみじは風流風雅、天平の風雅のためのもみじとなったのです。見方が違うのです。生活に直に接したあたりまえのもみじ、それが美化したもみじに変わっている。

たとえば、詩人穂積皇子が、今朝の朝明に雁の声を聞いた。ああ春日山はもみじしたことだろうなあ、「わが情痛し」とうたう。もう本当に詩人穂積皇子の心に刻みつけられて胸痛ましめるような感じですよ。それも切れ切れに「今朝の朝明」で切って、「かりがね聞きつ」で終

止、「春日山」また小休止、「もみちにけらし」で終止、「わが情痛し」で終止。本当に詩人の心にくい込む、作者の心にしみて来るところです。

たかしきの うへかた山は くれなるの 八入の色に なりにけるかも (15・三七〇三)

ところが、「たかしきの」の遣新羅使人の歌になるとどうでしょう。人間の歴史的社会的な置かれ方によって、対象との関係は違って来るのです。この遣新羅使人行は、天平八年、西暦七三六年の真夏に出發しました。で、新羅まで行って、直に秋には帰って来るよと言ったのに、途中でたびたび遭難しました。山口県の南でも遭難したし、玄海灘をなかなか渡れなかったし、朝鮮海峡もなかなか渡れなかった。それで、対馬の浅茅湾の湾内にあるもみじを見て詠んだ歌です。

これは、紅葉したなという色を詠むだけではなくて、この中には、秋になったら帰ると言ったのに、今まだこんな所にいるという望郷の思いが一杯です。前の穂積皇子の歌は風流風雅な歌になるでしょう。ところが、この歌は、現実にはうへかた山の真赤なもみじを見て感慨無量で、もう秋になって帰る時期が来たのになあ、今まだ、ここにこうしているか、という望郷とそうしたたまらない気持が、ここで折り重なっているのです。

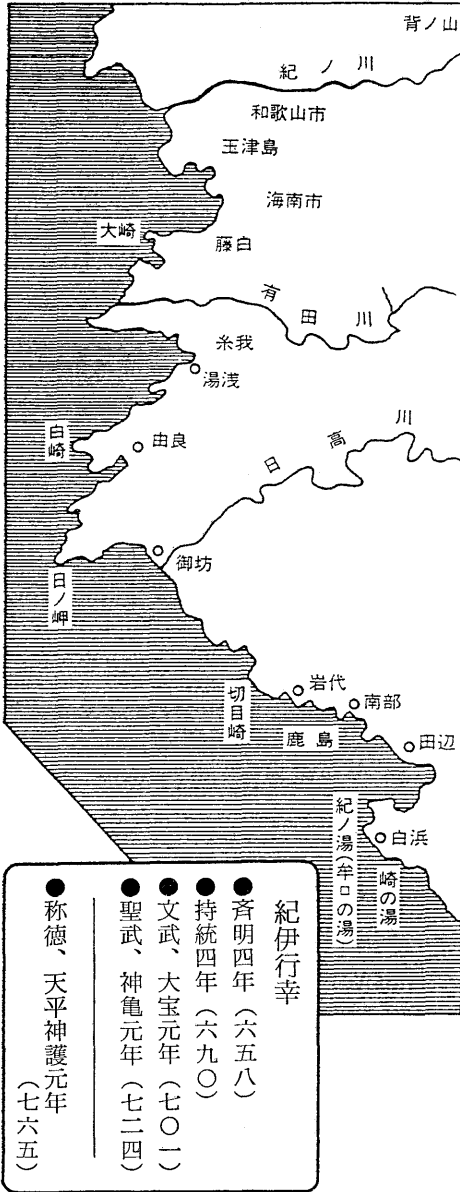
すなわち、自然のもみじというものはあるけれど、もみじに対して置かれた人間の社会的歴史の立場の違いで、こんなにも歌い方が違うのです。穂積皇子は本当に天平・奈良の風雅ですね。その分こちらは切実に望郷の思いを歌っている。

(五)

今度は五番の共感共鳴。人間て自然に対して本当に影響を受けることが多いですね。世の中や、まわりの景色

がこうだから、わたしはこういう気持ちになると意識はしないけれども、無意識心理が及んで影響することがある。

さて、史書には、万葉の時代に紀伊行幸が四回ある。齊明四年（六五八）、あの有間皇子の事件の時。それから持統四年（六九〇）。文武天皇の大宝元年（七〇二）。この三度とも牟婁の湯、今の白浜温泉への行幸です。さらに聖武天皇は神亀元年（七二四）、和歌浦に行幸された。聖武天皇のお嬢さんの称徳天皇も、天平神護元年（七五六）



付図 2

に和歌浦まで行幸された。

和歌山の歌はたくさんあるので、それを今ここで一つ一つお話できないが、日ノ岬から北と南では紀伊国の風土は全く違っています。北は湾入が多いリアス式海岸、すなわち溺れ谷が多い。それに対して日ノ岬より南は、全部歩きましたが、屈曲はあるけれども北ほどではない。屈曲は田辺湾だけです。

そして、日ノ岬から北は沈降海岸で、だんだん海が深くなっていくのです。一方、日ノ岬から南は、ずっと土地が隆起して来ているのです。その証拠には、白浜の干畳敷は海底だった。それが何億年か知らないけれど、今あそこまで上がって来ているのです。汽車に乗ってみたら、それが一番よく分かる。御坊から南は、何ときれいな海岸になるでしょう。隆起した岩がたくさん出ている。太平洋を寄せて来た黒潮の波が高くなって、海岸が波で崩れて海蝕崖ができる。それだけ景色は、男性的・躍動的となり、ハマユウが咲く南国的な所です。

まず、景色が全然違うということは、海を知らない大和の人たち、天皇の御供をして来た人たちが歩いて来て、田辺湾の辺りに来たら、みんな夢中になります。景観が男性的・南国的・立体的・躍動的になると、作者の万葉の歌もまた、躍動的になっているからおもしろい。

その一例として次の歌をお話ししよう。南に行けば行くほど景観とともに人間の心が躍動的です。

三名部の浦 潮な満ちそね 鹿島なる 釣する海人を 見てかへり来む (9・一六六九)

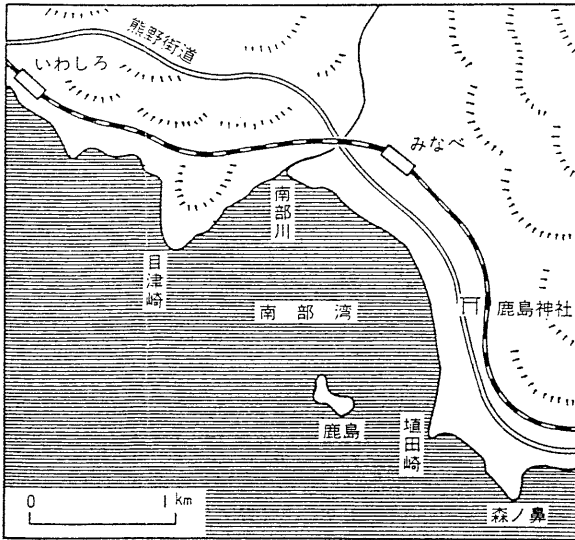
この歌は七〇一年、文武天皇と持統太上天皇が、一緒に白浜にいらした時の歌で、三名部の浦というのは、地図の弓なりの南部湾です。三名部の浦よ、潮が満ちないでくれよ、わたしは鹿島で釣する海人を見て帰って来ようと思うから。埴田崎から向こうの鹿島の磯で釣している人の姿が見える。大和の人だから海人を知らないでしょう。あれが釣する人か、見られたら見て来たいなあという歌です。

ところが、この歌を調べるために、ほとんど全部の注釈書や地誌類を読みましたら、この歌を見て、だから昔は埴田崎と鹿島の間は歩いたのであると書いてある。この歌を証拠にして、昔は潮が干いたら歩いたのであると書いてある。

僕はこの歌をそうは思っていなかった。そういう意味じゃないかと思っていた。作者が南に懂れて、景色が男性的・躍動的・立体的だからたまらない気持を言っていると思っていた。作者が三名部の浦に行くと、島との間には潮がいっぱい躍っているのです。「うわあ、すごいな

あ「こんな豊かな潮を見たことがない」「あっちには島の所に釣する人がいる、あれが釣する海人というものだ」と思って、自分が事実行くのではなく、行きたいなあと思うだけです。

天皇の御供をしている者が、私的にちょっと島の漁師を見て来たいなどとはできないはずですから。だから、



付図 3

これは先ほど述べた共鳴共感した感動を言っているのだと思っていた。

僕は、ここへもう二十年くらい毎年行っている。それで、絶対に歩けないことを証明しました。その方法は、まず南部の漁協組合長に聞きました。絶対歩ける所ではないと言う。隆起した今でも、岬と島の間は三〇〇メートルの幅で深い所がある。この深さは、一番浅い所で九ヒロ、深い所で十三ヒロ（一ヒロというのは人間が両手を広げた長さ）、それだから、ここは人間が歩けたはずはないと漁協組合長が言うのです。

それから、本当にそうかなと思って、今度はメガネを持って船の上から覗いて見た。初め海藻が揺れ、魚がいてきれいだなあと思っていると、急に真暗になります。そうして再び海藻が見え出すのです。二、三度ここを往復しまして、暗い所の底の深さを測ると、やはり九ヒロ、十三ヒロでした。ここは万葉の時代より隆起して、底は浅くなっているのですよ。本当にそれは絶壁です。とても歩ける所ではないのです。

それが分かると、この歌は作者のなんと驚きでしょう。「三名部の浦潮な満ちそね」と二句で切った所も共感した感じが出てくる。行きたいことは行きたいが、行けないことは分かっているから、ただ潮がいかに満々と

躍っているかという驚きです。その驚き、そして鹿島には海人という者がいるぞ、ああ、見たいなあ、見たいなあというその感動。作者は南へやって来て、その感動を強く言っているのです。

だから、この歌を理由にして、昔は歩けたのであるというの、とんでもない事です。歌なんか証拠にならないのです。歌は心情の真実です。ところが、よく事実の真実と間違えてしまう。歌は人間の心の真実をいうけれど、とうてい事実じゃない。だから、文学の世界を広く言えば、文学者の言うことは、心では真実であるが、実際とは違うのです。この歌も、海を渡れないので共感共鳴する作者の驚きの真実であって、事実の真実とは違うのです。

(六)

そこで、今度は六番、心情の真実と事実の真実について。

住吉の 得名津に立ちて 見渡せば 武庫の泊ゆ
出づる 船人 (3・二八三)

高市黒人の有名な歌ですね。住吉の得名津は、今日どこか分からないけれど、住吉大社の近くの海岸の港であったでしょう。得名津の所に立って武庫川の河口辺り、

西宮の方を見渡すと、武庫の泊から出て来る船頭が見える。もし、これが本当ならば、驚嘆です。目は二・〇よりもはるかにすごい目ですね。

そんなことはありえないから、ある万葉の本では、住吉というのは、今の住吉と少し違うのではないか。もっと北の方、淀川の近くまで住吉といたたのではないか。それから、次に武庫の泊は、西宮だけではなくてもっと東の方、神崎川辺りではないか。そして、両方で互に見やうって、船の上に人が乗っているのが見えたら、両地点はその辺りであろうという。

そんなことをしても、全然違う。住吉から西宮の方は見える。船も大きい船なら見えるけれど、船頭の顔までは見えない。ということは、事実はこうです。

昨日の雨が降り止んで、空気がきれいで清潔です。そして、向こうに船が大きく見える。ああ西宮の方が見えるなあ、なんと今日は天空海闊のすばらしい日だろうかという気持を歌っている。そのことを高市黒人は歌おうとしているのです。実にきれいな大阪が、きれいな空気がまでも思われるではありませんか。作者の喜びも躍り出て来る。

これは、事実と全然違う心情の真実であって、事実の真実ではないということです。歌は本当に違います。と

ところが、人によると、そういうふうには事実の真実と見る人もある。

その例をもう一例。

み熊野の 浦の浜木綿 百重なす 心は思へど 直
に逢はぬかも (4・四九六)

僕は浜木綿の葉が層々と重なって、心で深くあのように重なるように思っているけれども逢えない、という歌だと思っ

そうすると、理学博士の人が浜木綿を三つ送って下さって、「犬養さんは、あの浜木綿の葉が百重なしたと言うけれど、違

う。あれは茎なんだ。輪切りにして見よ。茎の百重なすが分かる」という。しかし、人麻呂がこの歌を作る時に、まさか輪切りにして、そうじゃないと思う。

(七)

さて、今度は七番。文芸の風土。それは何かという

と、今の言葉で言えば、山部赤人は文学者だということに通じます。

普通の人は、たとえば「昨日白浜へ行った」「どうだった」と言うと、「よかったよ。とてもよかった。すばらしかった」というでしょう。ところが、宮廷歌人、山部赤人は答え方が違うのです。すばらしいとは一言も言わない。山部赤人は和歌浦に行って、おそらくすばらしいとも思っただしょう。あるいは、海を見たことがあまりないから、夢中であつたでしょう。潮が満ちて来る時の、そそけだつた感じ、旅愁にはびつたりだつたと思

う。ところが、旅愁とか夢中だとか、そんなこと一切言わないで、山部赤人が自分で作り出した景色を歌うのです。それが神亀元年の長歌反歌です。

今、その前に、赤人の文芸を理解するために、別の歌を一首。

恋しげみ 慰めかねて ひぐらしの 鳴く鳥影に
いほりするかも (15・三六二〇)

これは、遣新羅使人の歌です。瀬戸内海を行く遣新羅使人の歌は、すぐ自然です。自然の景色に従順です。普通の人は、自分で自然の景色を作り上げてみようなどと冒険はしません。普通は、丘へ上がって蝉が鳴く。で、故郷が恋しいというふう

この歌も、故郷が恋しい気持が激しいものだから感めかねて、折から、ひぐらしの鳴く島影に、広島県倉橋島の本浦という所ですが、船旅の船泊りをしていることだと歌っています。その仮りの船泊りをしている時に、ひぐらしが鳴く。それで望郷の思いに駆りたてられる。自然に対して、自分は自然を作り出そうとするのではなく、きわめて自然に従順に歌っています。

遣新羅使人の歌は、瀬戸内海にたいへん多く、なかなかいい歌が多い。瀬戸内海の景色にきわめて従順で、景色が変わると、それに応じて、望郷の心、つかの間の思いを素直に述べています。そこに遣新羅使人の歌の良さがあると僕は思う。

ところが、現在、一般に専門歌人の方は、遣新羅使人の歌なんかくだらない、見たくもない、創作らしい所が無いのだからという。そして、山部赤人の歌の方はすばらしいと讃える。専門歌人は、やはり山部赤人のような歌人らしい歌人の歌の方がいいのでしょうか。

場所を瀬戸内から紀伊国玉津島に移しても、普通の人

は、
玉津島 見れども飽かず いかにして 包み持ち行
かむ 見ぬ人のため (7・一二三二)
と歌います。「玉津島どうだった」「すばらしかった。よ

かったよ」「玉津島は見ても見ても見飽きないよ。まだ見ない人のためにどうやってもって行こうか」と普通の人は歌うのです。ところが、黒人・赤人などはそんなこと言わないでしょ。見たい人のために持って行きたい気持はあるけれど、そうは行かないので、神亀元年(七二四)十月五日に大和を出て、四日かかって十月八日に和歌山に着いて、赤人は次のように歌った。

やすみしし わご大君の 常宮と 仕へまつれる
雑賀野ゆ 背向に見ゆる 沖つ島 清き渚に 風吹
けば 白波騒ぎ 潮干れば 玉藻刈りつつ 神代よ
り 然ぞ貴き 玉津島山 (6・九一七)

反歌二首

沖つ島 荒磯の玉藻 潮干満ちて 隠ろひゆかば
思ほえむかも (6・九一八)

わかかの浦に 潮満ち来れば 瀉を無み 葦辺を指し
て 鶴鳴き渡る (6・九一九)

今、細かいことは抜きにして、赤人の長歌の特色について一言。赤人の長歌は、全部で十三組あります。十三組を調べてみると、三つの類型がある。

一つは、この歌のように、長歌は観念的に対象を讃めれば、反歌はそれゆえに写實的・現實的に讃める。たとえば、富士の山の歌もそうです。長歌は日月星辰を抑え

て、宇宙に睥睨している観念的な富士。一方、反歌は写実的な富士です。吉野の歌も長歌で吉野の山と川を観念的に歌い、二首の反歌では、山と川で統一して現実に歌っている。

そうすると、この歌も観念型です。観念的モンタージュ型です。長歌で、玉津島山は満ち潮の時もいいし、干き潮の時もいい。神代の昔から、なんとすばらしい所だろうと観念的に讃めている。そして、第一反歌が干き潮の現実、第二反歌が満ち潮の写実を歌っています。

二つめは、長歌が一つの叙情で統一すれば、反歌も一つの叙情で統一する型です。たとえば「春日野に登りて作る歌」(3・三七二～三七三)がそうで、長歌も反歌も片恋の嘆きを歌っています。この叙情統一型は五組で、先の観念的モンタージュ型は六組でした。

三つめ、残る二組は辛荷島の歌(6・九四二～九四五)と明石潟の歌(6・九三八～九四一)です。いずれも反歌が三首で、これは三首なければならぬのです。たとえば、辛荷島の歌では、長歌で、淡路島を過ぎ東から西へと往路を歌い、反歌三首は逆に、西から東へ、辛荷島から都太の細江へと復路を歌う。これは作者のパノラマ型・移動風景型の長歌です。

そこで、紀伊国の歌に戻りますと、これは観念的モン

タージュ型の長歌です。最初の八句、うまいですね。これをカメラで写すと、最初に雑賀野の離宮を写し、そこから背向(後ろ)に見える沖の島へと一八〇度転回している。大変、動的ですね。うまいですね。

次に「沖つ島の清き渚」が舞台になります。満ち潮の時、風が吹くと白波騒ぎ、潮が干くと玉藻を刈り、ああ神代の昔から、こんなにも貴い玉津島だなあと歌う。だから、第一反歌では干き潮。でも、長歌では満潮・干潮の順だから、二首の反歌は干潮・満潮の順になるので、第一反歌は沖つ島、玉津島の荒涼とした磯の海藻を歌っています。潮が干いて、手に取れそうな海藻、だが、取れそうだと歌わないところが赤人の本領です。潮が干いた所へ潮が満ちて来て、水底に隠れて行くようになったら、どんなに懐しく思われるだろうかなと歌う。

歌っていることは、干き潮の現実ですけども、干き潮の現実を現実として歌わないで、沖つ島荒磯の玉藻潮干満ちてと歌うところは、何と芸が細かいことでしょうか。細みですね。山部赤人らしい細みの芸術です。

そして、第二反歌は満ち潮でしょ。この歌全部に満ち潮の音楽が奏でられています。それは、わかぬ浦に潮満ち来れば、今度は干潟がなくなって水が一杯になる。すると、芦辺を指して鶴が鳴いて飛んで行く。みんな岸の

方へ岸の方へです。だから、この歌には、満ち潮の音楽が伴奏として鳴っています。

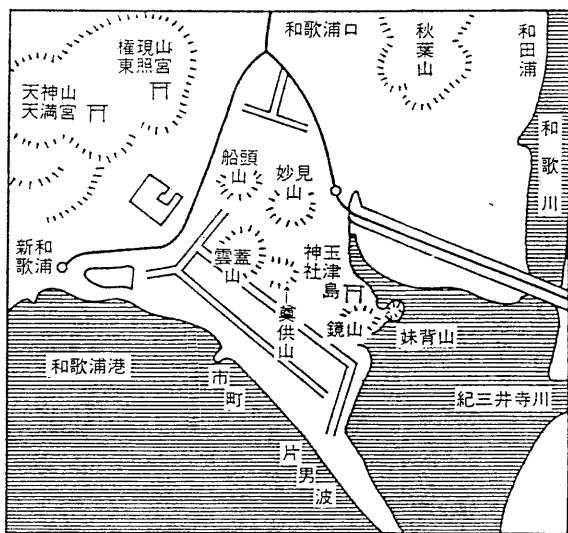
このように山部赤人は、長歌でも反歌でも、「何とすばらしいのだろう」「見ても見飽きない」など、そういうことを一切言わない。先の「玉津島見れども飽かず……」は、一般の人の歌ですから、土地の名前さえ変えれば、どこにでも通じます。「富士の山見れども飽かず……」「筑波山見れども飽かず……」とは歌えますが、これはそうは行かない。山部赤人の独創です。山部赤人の新たに創り出した文芸的風土です。山部赤人でなければできない美の典型をここに生み出しているのです。

人間は美の典型のようなものに、権威に弱いのですから、今度は山部赤人が歌の神様みたいになって、みんなから讃められたえられるようになります。だから今日、この歌を知らない一般の人でも、わかの浦という聞いたことがあるなあと思いい、山部赤人、聞いたことがある、いい所かなあと思ってしまう。

そのことが今日に影響して、和歌山県和歌山市和歌浦町、地名がすべて影響を受けています。その和歌浦を臨海工業地帯にするというから、僕、県知事さんに「もしそんなことをしたら、和歌山県は自分自身の手でもって象徴を失うじゃないか。和歌山県は和歌浦があるから

和歌山県なのだ。それを臨海工業地帯にするなんてとんでもない」と言いました。で、今は市が管理して絶対に他に売らない。

この和歌浦の海岸に細く出ている砂洲がある。これを片男波海岸と言うのは、意味は違うけれど、この歌から来てるでしょ。そして、和歌浦には葦辺旅館まであつ



付図 4

た。みんな赤人の影響です。それで今、観光の中心は、新和歌浦です。新たな土地の名前ではだめで、新をつけても和歌浦にしなければだめなのです。さらに、昭和三十年代くらいに、新和歌浦の奥に雑賀崎国定公園がひらかれた。ところが、雑賀崎国定公園にお客が来ない。そこで、やはり和歌浦に新と奥とをつけて奥新和歌浦、略して奥和歌と呼ぶようになった。

これは、赤人の風土を和歌山が創り出したのです。勉強している人から見れば、山部赤人の和歌浦なのだなど思い、知らない人は、何か知らないけれど和歌浦なのだ、すばらしい所だという印象を持つのです。これが文芸的風土で、一方では、普通の人の素直な自然に対して従順すぎる歌も見られたのです。

(八)

今度は第八番目。二つの富士。

天地の わかれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河
なる 富士の高嶺を 天の原 ふりさけ見れば 渡
る日の かげも隠らひ 照る月の 光も見えず 白
雲も い行きはばかり 時じくぞ 雪は降りける
語りつき 言ひつきゆかむ 富士の高嶺は

(3・三一七)

反歌

田児の浦ゆ うち出でて見れば ま白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける (3・三一八)

この二十句ほどの長歌と一首の反歌の中に「富士の高嶺」は三度出て来るでしょ。ここにも山部赤人が地名によって、自分の心を表わそうとする意識があります。

もし、頭注をつけると「富士山、日本一の山。高さ三七七メートル」となるでしょうが、そういう富士とは違うのです。赤人は富士を歌う時、富士の高嶺を、富士の高嶺は、富士の高嶺に、と全部助詞を違えています。作者は、まず第一の富士を点出し、続いて日月星辰を抑えた天下を睥睨している富士、それから今見えている冷たい富士・雪の降った富士と三段構えで富士を歌う。

そして第一段は、天地開闢の時から神さびて高くつて貴い駿河なると全部富士の形容でしょ。「神さびてますよ。高いですよ。貴いですよ。駿河の国の富士山は」と本当にいかにも富士は三七七メートル、もっと高くなりそうな感じですよ。その次は、渡る日も否定、照る月も否定、白雲も否定、時じく雪だけは肯定。この肯定が次へ伸びて行く鍵です。

反歌では、明確に写真的に、近景として田児の浦の海を置き、その後ろに富士を置いて、「ま白にぞ富士の高

嶺に雪は降りける」と歌う。長歌では、「時じくぞ雪は降りける」、今度は「真白にぞ雪は降りける」で、音楽として完成させる。山部赤人の実に細かい芸当です。

次は東歌の富士です。東歌については、いろいろ説があるけれど、僕はやはり土地から生まれ、土地の人の間で歌われていた歌ではないかと思う。一般説のように自然発生的な歌で、都の人が作ったのではないと僕も思う。そうすると、赤人の歌と何と違うのでしょうか。

たとえば、山部赤人は、当時一番教養の高い人で、宮廷歌人、奈良の都会人です。それから食うに困る人と違うのです。美というのは、あまり困った時に出て来ないものですが、山部赤人には生活の苦勞はないのです。しかもそれだけでは富士の名歌は生まれて来ない。一番大事なことは、旅人だということです。

教養が高くて、宮廷人、都会人、生活の苦勞のない人。その人が初めて富士を見た。僕は舞台を薩埵峠だと思っている。もう一カ所七難坂という所で富士が見えますが、何も二番目にするのではないから、薩埵峠で初めて富士を見て、目の前に田子の浦、後ろに白い富士、その感動を歌ったと思います。旅人として最高の旅ですね。赤人は、都にいて富士の話は聞いていた。その人が初めて富士を見たから、これだけいい歌ができたので

す。

さて、東歌に戻って、東国の静岡県の東歌。富士山の歌もいくつかあります。

天の原 富士の柴山 木の暗れの 時ゆつりなば
逢はずかもあらむ (14・三三五)

これは「天の原富士」だから、空の中に富士は描かれていることは描かれています。ところが、舞台は富士の柴山、雑木山で、今日の日の暮れ方、木の暗い所です。そこで今宵逢う瀬の大事な時が過ぎてしまうと、逢えなくなるのではなからうかとの嘆きをうたっている。この歌のように、東歌の中で一つだって富士を美として味わっているのはないですね。普通の人は富士山というが大変美しいと思うでしょ。ところが、住んでいる人は美とは思わない。美でないとはいわなければ、富士は親しい山であっても、美という意識が出て来ない。雪の山きれいだなあというのは、言われればそうかも知れないが、年中、見なれている土地の人には、少しも興味なんかないのです。

この富士山の麓の人にとっては、大事なものは頂上が白雪ということではない。それより富士の柴山、雑木山が大事です。きのこを採ったり、薪を切ったり、人間に親しいのは雑木山です。その木の暗れは今宵逢う瀬の大事

な場所です。富士は赤人の美としての富士とは全然違う生活の富士ですね。

次の歌も富士を歌った東歌です。

富士の嶺の いや遠長き 山路をも 妹がりとへば
けによばず来ぬ (14・三三五六)

富士山の裾野の、ますます遠く長い山路であっても、好きなお前のもとといえ、うめきもしないでやって来だよ。思うて通えば千里が一里というでしょ。富士山のいやになるほどの遠く長いラバの崩れの山道だって、好きなお前の所へは息も切らずにやって来たよと歌う、富士の裾野の恋歌です。

この富士山の裾野も、僕はそこで働く人でないから、本当に好きです。朝起きて日が上っていたら、なんといいでしょう。ところが、土地の人は一人だって、目を覚ましていいなあと思っている人はいない。何とも思わない。裾野を何里歩いて、何キロ歩いて同じでしょ。ラバの崩れには変化がない。むしろ、富士山の裾野がどうしてこんなに長ったらしいかと思うのです。

このように、東歌を見れば、富士は美の対象には一つもなっていない。これは、土地に定着している人には、少しも興味がありません。赤人のように、条件の揃っている人は讚めたたえるけれど、これを見ても、二つの

富士、すなわち、富士に対して人間の心の違いがわかりますね。

(おわりに)

今日の万葉の風土よもやま話は、八つに分けてお話ししました。みんなそれぞれ大事なことだと思えます。対象と人間との関係です。

みなさん、万葉集をどうぞたくさん読んで下さい。歌うこともぜひ、楽しいものです。

それでは、御清聴ありがとうございました。